



日本体育大学

Nippon Sport Science University



学報 NITTAIDAI 2021.SPRING 64

日体維新。伝統を誇りに、次代の日体像を創る。

特集■学長・副学長・役職者メッセージ

学長メッセージ ——— 1

「総合大学としてさらなる進化を目指す」新学長誕生

役職者メッセージ ——— 5

副学長「変化を恐れず、新たな時代を切り開く」

体育学部長 体育学科長 健康学科長

スポーツ文化学部長 武道教育学科長 スポーツ国際学科長

スポーツマネジメント学部長 スポーツマネジメント学科長

スポーツライフマネジメント学科長

児童スポーツ教育学部長 児童スポーツ教育学科長

保健医療学部長 整復医療学科長 救急医療学科長

大学院研究科長代表

日体大を極める ——— 14

Next is you 日体魂の聖火リレー ——— 15

～日体魂を受け継ぐ者～ 第16回

応援団 監督 鈴木憲一 団長 花島優太

持続可能な社会の実現のために。
「日体維新」を掲げ、伝統を受け継ぎつつ、
総合大学としてさらなる進化を目指す。

第13代学長

石井 隆憲
いし い たかのり

5学部を擁する「身体に纏わる文化と科学の総合大学」に発展を遂げた日体大。教育・研究領域の拡大をはじめ、選手強化、国際化、ワンファミリーの連携の強化など、日体大のブランド強化に向けて、これまでも改革に果敢に取り組んできました。これを推進しつつ、社会の趨勢や期待に応えて、いっそう進化を加速する必要があります。新学長のもと、さらに質の高い教育・研究・社会貢献活動を展開するための体制構築がスタートします。

コミュニケーションを重視し、学部の色を強く打ち出すための施策を

◆学長就任にあたっての 思いや決意

日体大は非常に伝統のある、今年度で歴史も130年になるうとしていた大学です。近年、5学部を擁するいわゆる総合大学へと発展を遂げています。その背景には時代の変化に伴う社会からの大きな期待がありました。しかし、組織の運営や教職員の意識は、体育学部のみ単科大学だった頃と比べて変化がないように思え、危惧しています。私は本学の出身者ですが、7年ほど前に戻ってくるま



石井先生の専門はスポーツ人類学。ミャンマーの伝統的なスポーツ「チンロン」をおもなテーマに、ミャンマーの諸民族のスポーツ、ミャンマーという国家のスポーツ運営のあり方などについての調査・研究に取り組んでいる。

で他の大学で28年間を過ごしました。その間、複数の学部の移動も経験する中で分かったことは、同じ大学でも学部ごとに独自の考え方があり、それぞれが独立して組織を運営していたことです。そこで各学部をより活性化させ、総合大学としての第二建学、言わば「日体維新」を成し遂げようという決意し、学長への就任を志しました。積み上げた130年の歴史の中で、必要であれば果敢に刷新する。日体維新はそういう意味合いになると思います。

◆学長として考える 日体大のありたい姿とは

これまで掲げてきた「身体に纏わる文化と科学の総合大学」という方向性には変わりありません。本学は一般の大学とは異なり、複数の学部を持つ総合大学でありながら、体育・スポーツという分野に特化しています。その特化した部分で統合されつつも、各学部が専門性を大いに高め、独立した組織として運営されていく。それが目指す大学の姿です。

その方法としては、体育・スポーツに関わる領域を多くの切り口で見せていけば良いのではないかとこれまで考えていました。しかし、コロナ禍で飲食業が料理宅配業と組んだように、危機を乗り越えるためには、自身の近接領域にある他者とのジョイントが打開策になるのではないかと思うようになっていきます。

◆「日体維新」に必要なことは

例えばコロナ対策にしても国によって違いがあります。規模は小さくても、大学も構成要素は国家と変わりがありません。クラブや家族も根本的な部分は同じです。そこで何が一番必要になるかと言えば、コミュニケーションを取ることです。いろいろな人たちから意見やアドバイスを聞き、調整するのが上の人間の役目

になります。その点で、皆さんからの意見を集約するための組織づくりを行っていきたくと思っています。

4年という任期でできることは限られているかもしれませんが。大学としては、今の若い人たちが私ぐらいの年齢になる20年か30年先を見据え、長期のスパンで方向性を示すことが求められます。その先鞭をつけることが私の役割です。

◆注力していきたい施策

私が重要だと感じ、推進したいのが次の二つの柱です。

一つ目は、学校法人日本体育大学が掲げる基本方針である「選手強化」「国際化」「ワンファミリー化」に積極的に協力していくために、大学の体制の整備ならびに機能の活性化を図っていきます。

二つ目として、先ほどもお話ししたように、5学部が独自の特徴を打ち出すことができるように学部長を中心に据えた学部固有の政策を推進するシステムの構築を目指します。その一方で大学全体として、建学の精神を踏まえたSDGsへの取り組みとともに、学部間を連結させるカリキュラムの構築と教員が教育・研究・社会貢献に十分に時間をかけて向き合えることのできるような制度改革を断行していきます。

〈選手強化〉

本学の先進的な取り組みであるアスレティックデパートメントと伝統的な学友会との有機的融合を図りたいと考えています。アスレティックデパートメントはアメリカの大学の運動、クラブのシステムです。それを日本に取り入れ、大学組織の中に浸透させるという動きが、この数年の間で起っています。加えて、本学に

は従来からの学友会などの組織があります。これら新旧の組織の役割分担を明確に行い、相乗効果が出るようジョイントさせることで、運動部のさらなる強化につながるのではないのでしょうか。例えばアスレティックデパートメントが獲得してきた資金を学友会に活用することも可能です。どのようなシステムで稼働させるか、今後も検討を続けていきます。

〈国際化・ワンファミリー〉

先に述べた「選手強化」に加えて「国際化」「ワンファミリー化」は、学校法人日本体育大学の基本方針です。

国際化では、交流協定校との間で海外留学制度だけでなく、学術交流やスポーツ交流を徐々に促進していくための基礎作りをします。また、国際交流を推進していくための基礎を作る現行のシステム（JICA短期ボランティア合同帰国報告会、Global Café etc.）の拡大・強化を図っていきます。

ワンファミリー化では、設置校や附属校と大学が一体となって活動できるように連携の取れるような制度を導入します。これにより例えば、調査研究や研究授業などを協働して行えるような体制を目指します。さらに、現在も行われている高大連携の強化（例えばWeb会議システムを用いた大学からの講座提供など）を引き続き展開します。また、設置校からの入学者を段階的に増やしていくことを目指します。

〈教育・研究分野〉

そして、重点的に取り組みたいテーマは、カリキュラムです。各学部が独自性を出して社会の要請に添っていくには、カリキュラムは極めて重要な存在です。受験生に学部の魅力を伝える、将来どういう職に就けるか、大学



〈組織、ガバナンス〉

大学が本来持つべき機能をしっかりと維持していくためには、教員の働き方も考えていかななくてはなりません。本学の現状は、教員一人当たりの授業負担が非常に大きく、何らかの働き方改革が必要な状態です。大学は教育だけではなく、研究の場でもあります。そこから新しい知見を世の中に問うていくためには、普段から研究をするための時間が必要です。

そのための喫緊の方策がカリキュラムの構造と授業の方法の見直しです。そのほか、教員の研修制度（国内外でのサバティカル制度）の活性化、社会貢献やボランティア活動への参加促進なども構想しています。

また、学部のブランディングの点では、学部・研究科において中期目標や計画の策定を行い、学部の独自性とそのための戦略を明確化していきたいと考えています。

〈社会貢献〉

大学らしい貢献は、研究した成果を世の中に発信することです。スポーツをするときにこういうことに気をつけましょう、科学的にこのように証明されました、という提示です。例えば、体育の時間に水を飲んではいけないというかつての定説が、科学的証明に基づいて覆されました。このように、科学的な知見をもと

に提示するのは大学らしい貢献の一つです。

一方、スポーツの世界では、必ずしも知識のみでは完結しない領域もあります。それは方法の知識という「方法知」です。例えば、水泳の本を百冊読んでも泳げるようにはなりません。実際に練習をして体が覚えないうとできないことはたくさんあります。体育やスポーツはそうした部分も担います。自分自身がその場に出向き、体を使って教えることが社会貢献になりますから、そうした実践の機会を増やす必要もあると考えています。

◆課題克服のために

多くの変化を目指す「日体維新」は一人の力では不可能です。教職員の皆さんの協力や行動力が必要です。同じ意識を共有していないと進められません。最初のうちは漠然としていても、自分の周りが次第に変わっていくれば、世の中の変化に対しても意識せざるを得なくなります。そういう状態が生まれるように頑張りたいと思います。

まずは繰り返し述べてきたように、各学部が独自の方針を持ち自主的に運営できるかどうかが試金石です。それぞれの学部には目指す目標や教育内容があり、いわゆるミッションも設定されています。それをいかに具現化するか。各学部の学部長を中心とした先生方から明確に出てくれば、第一歩となります。

スポーツの未来像や可能性を共有し、私たちに課せられた使命を考えてほしい

◆日体大を志す受験生、

高校の先生方へ

日体大を受験する多くの方が、日体大と言えば体育の教員と、そういう認識がセットになっています。ですから教員免許を取りたいという学生たちがとても多い。それ自体は良い

ことですが、できるならば、スポーツの世界をもっと広く見てもらいたいと思います。

実はスポーツの価値は、この20年ぐらいの間でもすごく拡大しています。その拡大にともなう、スポーツや体育が果たせる役割が大きくなっています。そういうものを見据えた時、もちろん体育の指導者や教員という存

◆大学で学んでほしいこと

すべてのスポーツには基礎があります。それを飛ばしていきなり上級者になれるものではありません。学問の世界も同様です。よく「無から有を」と言いますが、学問においては、無から有は生まれません。ある一定の知識が

ないと、新しいものは生み出せないのです。いわば「有から有を」生み出すことが求められます。

そのために必要となる知識を、在学中にしっかりと蓄えていく必要があります。そこで蓄えた知識を活かして、時代の変化を踏まえた新しい考え方やアイデアを生み出せる人材になっていただきたい。そのためには本学に在籍する4年間、一生懸命に勉強に励むことを、すべての受験生と在学生に対して望みます。

◆卒業生、日体大関係者、地域の方々へ

さまざまな分野で活躍する本学の卒業生や、これまで日体大を支えてくださった多くの方々に分かつていただきたいのは、皆さんが自分たちの時代に受けた体育やスポーツに関する知識は、今や大きく変わっているということです。そうした状況を知った上で、あらためてこれからもご協力をしていただけると、非常に嬉しいのです。

と言いますのは、例えば私はこの3月までスポーツマネジメント学部の学部長を務めていましたが、スポーツマネジメントという言葉は学校の保健体育の先生方にとって、非常に分かりにくい言葉となつています。なぜならスポーツマネジメントという概念は最近登場したものであり、昔はそうした考え方を、世の中には浸透していなかったからです。しかし高校の先生がスポーツマネジメントを理解していないと、高校生やその親御さんにも十分な説明ができません。すると体育の道に進むなら体育の先生だと短絡的に結び付いてしまいます。実際には多様な業態や可能性があるので、それが伝わらない結果になってしまうのです。

こうしたことをステークホルダーの方々にも知っていただき、みんなで体育やスポーツが果たす役割をあらためて考えていく。それは本

学にとつても、体育・スポーツの世界にとつても間違いなく大きなプラスになるでしょう。

◆時代の中でも変わらない日体大の伝統

日体生の多くは、長い間スポーツに打ち込んできた経験を持っています。そのため物事を継続することを苦にしない傾向があります。これは大いなる才能だと感じています。他の大学で教えていると、同じことを延々と繰り返すことができない人が一般的です。しかし本学では、例えば野球だったなら、バットの素振りや毎日毎日、何百回と繰り返し続けます。そんなことを当たり前のように行っている人はそうそういません。

それは勉強や学問でも全く同じことです。どんな分野でも、毎日毎日、ルーティンとして繰り返すべきことがあります。そういう能力が、スポーツで発揮されるか、学問で発揮されるか、その違いだけの話です。同じことを継続して続けられる才能を持っている学生が多いというのは、本学の大きな財産であり、いつの時代も変わらない伝統です。

◆昔の学生と比べた変化

私たちの頃よりも、今の学生の方がずっと真面目で優秀だと思えます。さらにこれも時代の違いですが、学問のあり方が大きく変わっています。昔は人の知らないことを知っていたり、新しい資料を見つけてきたり、そういうところが評価されていました。ところが、今はインターネットが当たり前の時代で、必要な情報の多くはネットから入手できます。集めた材料でどんな料理をするか、掛け合わせをしてどんな新しい発見をするか、そこから先が問われる時代になっています。歴史や人類学と同じく、体育やスポーツに関わる学問でも自分の頭で考えて生み出すことが求められますが、それができる学生が増えていると感じます。

◆在学生に対してのメッセージ

昨年からコロナ禍の状態が続いたことで、人と会う重要性を知ったのではないかと思います。リモート授業のときも、みんな真面目に授業を聞いてくれるし、何かを問えば反応があるし、知識を与えると意味では一定の効果があると、私も最初は思っていました。

しかし我々が人として生きていく上で影響を受けるのは、授業だけではありません。授業の前後で先生から言われた一言や、友達同士のコミュニケーション。そうした要素の重要性をあらためて感じる機会にもなりました。コロナの影響はまだ収まりませんが、大学時代にできるだけ多くの人たちとコミュニケーションを取ってもらいたいというのが本意です。

◆スポーツを学ぶことのやりがいや意味

たくさんありますが、一つ例を挙げれば、これからの日本は間違いなく少子高齢化が進みます。そこで問題としてよく言われているのが医療費の削減です。毎年1兆円ずつ上がっていく医療費を如何に削減するか？健康を保つためには、さまざまな年齢に合った運動指導などが必要になるでしょう。

また家族の形態も変わっています。昔は核家族がひとつの家の単位でしたが、子供が進学や就職、結婚等で家を出ていくと、その後

は夫婦だけの家族となり、最後は単身です。そうすると高齢者や単身の人たちのサポートが不可欠になり、恐らくはコミュニケーションと健康をジョイントさせて提供していくことが望まれるでしょう。何かの体操や手遊びのようなものでもいいし、身体を使ったコミュニケーション、ノンバーバルコミュニケーションのようなものも当然のようにあるわけです。

このように運動やスポーツに対する社会的な期待や関心が高まってくれているので、学んだことを活かせる場面もさらに増えていくでしょう。

◆この春入学した新入生へ

手前味噌ですが、日体大は素晴らしい大学です。すぐく面白い大学だと思います。日体大の良いところは、先生たちや職員の皆さんがとても親身な対応をしてくれることです。それは体育やスポーツを教えるため、直接対面をして指導する伝統に基づいているのだと思います。

メールをちやうと見てハイ終わりとか、紙を渡してそれで終了とか、そういうことをする先生はほとんどいません。褒めるにしても小言を言うにしても、直接面と向かって言うのが伝統です。大学に来たらぜひ、さまざまな人たちに話しかけてみてください。きっと豊かな大学生活を送ることができると思います。



●Profile 石井 隆憲(いしい たかのり)
日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了(S60.3)／博士(社会学)／NPO法人日本チンロン連盟代表理事、元日本スポーツ人類学会会長、ミャンマー・スポーツ省客員研究員(H11.4～H12.3、H16.4～H17.3)としてミャンマーに赴き調査活動に携わる。
・学生時代の思い出：剣道部で良い人々に囲まれ、選手としては活躍できませんでしたが、その分、剣道以外でスポーツに関わる道を探しました。
・趣味・特技：ミャンマーの伝統スポーツ、チンロンです。リフティングのようにボールを蹴ってパフォーマンスを競い合うスポーツです。私は日本代表の監督も務めており、国内でのさらなる普及を目指しています。

新たな体制のもと、新しい時代に相応しい日体大を築く挑戦が始まります。
これからの大学・学部をリードする役職者の先生方にメッセージをいただきました。

変化を恐れず、

創意工夫し行動に移すことが大切

副学長(企画・管理・運営担当) 体育学部 学部長(兼任)

みずの ますひこ
水野 増彦



◆**就任にあたって**…副学長という職務を拝命することにあたって気の引き締まる思いです。本学の理念、ミッション、ビジョンに基づき更に発展させること、皆様のご意見、ご要望等を聞きながら皆さんと共に改革していくべきことを明確にし、行動に移していきたいと思っています。皆様方のご協力、よろしくお願い致します。

◆**抱負**…2012年、法人名を日本体育会から学校法人日本体育大学に改称して、①国際化②アスリートの競技力強化③日体ワンファミリーの方針のもとに、短期間で日体大の改革を進めてきましたが、その中でも日体大の生命線である「選手強化・競技力向上」の在り方について、積極的に関わっていき本学の最大の強みを継承できるよう、その方策をいまここで、熟考していくことが大切であると思っています。更に石井学長の掲げた公約の実現に向けて、国際社会の体育・スポーツ界の最先端に行く大学を目指し、副学長としてしっかり支えていきたいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**…コロナ禍によつて我々は多くのことを考えさせられました。日常的で当たり前の人とのつながりや命の尊さを思うとき、医療の最前線で献身的に活動が続いている関係者に改めて敬意を表したいと思っています。新型コロナウイルス感染症により、身体接触、集団活動を伴うスポーツは感染リスクが極めて高くなり、そのために国内外のさまざまなスポーツイベントは中止を余儀なくされて

きました。それによつて目標を失う選手ややる気を失う選手が出てきています。しかし、その心理的不安と闘い、苦難の中から復活し再生していくことを願い、折れずに前向きに自分の目標に向かって頑張つて欲しいと思っています。

◆**日体生に望むこと**…学生自ら主体的、自発的に行動し学ぶ姿勢が必要です。自分自身、どの方向に向かうのか目標を明確に打ち出し、その目標を達成するためどのように取り組んでいくのかを自ら考え、創意工夫し行動に移すことが大切です。また、何事においてもチャレンジャーであり、最後まで諦めない強い精神で大学生活を送つて頂きたい。社会において人と人との関わりを大切に、様々な立場の人とより良い人間関係を構築していくことも必要であると思っています。

●Profile 水野 増彦(みずの ますひこ)

①日本体育大学体育学部体育学科(S58.3)
②体育学士③日本体育学会、日本コーチング学会、日本陸上競技連盟強化委員(障害部長)、関東学生陸上競技連盟評議員歴任、文部科学大臣賞(H13/H15)、日本学生陸上競技連盟指導者功労賞(S63)、関東学生陸上競技連盟指導者功労賞(S63/H13/H15)④陸上競技部で仲間と共に練習に励んでいました。卒業後2年目の助手時代に日本選手権で優勝し競技人生最高の時を迎えました。⑤最近ではNetflixで映画や韓国ドラマを観ています。観葉植物や花を育てながら成長を見守るのも楽しみです。



副学長(教学・学生生活担当)

やぎざわ まこと
八木沢 誠

新しい時代を切り開く

充実した日々を積み上げて欲しい

◆**就任にあたって**…剣道部の2学年先輩である石井先生が学長に就任され、大きな喜びと期待を感じております。私自身が副学長に指名されたことについては大変光栄であると同時にその責務の重要性について改めて重く受け止めております。多くの懸案が想定されますが、議論を通しながら粛々と取り組んでいきたいと考えております。

◆**抱負**…石井学長が所信表明で述べられた二つの柱、つまり学校法人日本体育大学が掲げる基本方針である「選手強化」、「国際化」、「ワンファミリィ化」に積極的に協力するための大学の体制整備、ならびに機能の活性化を図るための組織の見直しと、もう一つの柱である5学部が独自の特徴を打ち出すことができるように学部長を中心に据えた学部固有の政策を推進するシステムの構築や、認証評価を見据えたカリキュラム改革、学部間を連結させるようなカリキュラムの構築を図ることが急務であると考えています。とりわけ教学・学生生活担当の副学長としてはコロナ禍における産物として、オンライン授業の可能性が大きく広がりましたので、トップアスリートを対象としていた遠隔授業を全学生に拡大し、ICT教育を活用したカリキュラムづくりを推進し、授業コマ数の削減や、情報通信技術を用いたマス授業の実現を目指したいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**…新型コロナウイルス感染症に新たな変異株も加わり、未だ収束の兆しが見えない中で、大学を取り巻く様々な問題に対して如何に対応していくのか、あるいは対応できるのかが問われていると思います。とりわけ本学の知名度は高く、良くも悪くもその取り組み方が他の参考にされる訳ですから細心の注意を払いながら、覚悟を決めて臨む必要があると思います。ましてや今年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。ピンチをチャンスに変える重要な機会です。全学の教職員が一致団結して取り組む事が新たな日体大のレガシーを築き上げるのではないかと思います。

◆**日体生に望むこと**…昨年度は非対面での授業がほとんどであったり、部活動も厳しい状況にありました。特に1年生(現2年生)は一度も大学に来ることなく1年が過ぎてしまったのではないのでしょうか。未だ「日常」に戻る迄には時間がかかりそうですが、このような状況は私だけ、私たちだけではありません。時間は巻き戻すことはできません。お金で買い戻すことはできません。今、この時を情性で過ごさず、充実した日々を積み上げて欲しいと思います。

●**Profile** 八木沢 誠(やぎざわ まこと)
①日本体育大学体育学部武道学科(S59.3)／日本体育大学大学院体育科学研究科(H2.3)
②修士(体育学) ③日本体育学会、日本武道学会、スポーツ史学会、日本応用心理学会、(一財)全日本学校剣道連盟常任理事、関東学生剣道連盟常任幹事、剣道教士八段④当時の剣道部は220名を超える部員数で、全国から集まった仲間と苦楽を共にした経験はかけがえのない財産となっています。石井学長とは合宿所で同じ釜の飯を食った先輩後輩の間柄です。⑤掃除と園芸。特に最近季節ごとに咲く花を育てることが楽しみです。

自ら一步を踏み
出すことが大切

体育学部 健康学科 学科長

よこやま じゅん いち
横山 順一

◆**就任にあたって**：人生100年時代がすぐそこまで迫り、健康寿命の延伸に多くの国民の関心が寄せられています。健康学科長として、社会のニーズを的確に捉えながら人々の健康増進に寄与できる人材の育成に力を注いでまいります。

◆**抱負**：健康学科では、第一種衛生管理者や養護教諭、社会福祉士等、健康に係る様々な資格を取得することができますが、卒業後は資格だけでなく実践力を併せ持って社会で活躍できるようにしたいと思います。また、このような資格の取得を目指さない学生にも、個々がしっかりと目標を持てるよう、そして「健康学科」に入って良かったと感じられる学修ができるように、所属の先生方と一緒に取り組んでいきたいと考えます。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：世界中が長期的にこのような事態に陥るということは予想だにできなかったことですが、コロナ禍による様々な制約下でのこの経験を、今後どのようにプラスに作用させていくかが重要だと考えています。

◆**日体生に望むこと**：「日体生だから」は世の中では通用しません。年齢相応の言動や所作を身につけるとともに、社会の情勢をしっかりと捉えて自分の将来について考える機会を得ましょう。具体的な目標が定まれば、意欲的に学ぶことができるようになります。目標を達成するために、学内のあらゆる資源（教職員、学友、施設、セミナー等）をフル活用してください。待っていては得られないこともありますので、学生の特権を生かして自ら一步を踏み出すことが大切です。

●Profile 横山 順一(よこやま じゅんいち)

①日本体育大学体育学部体育学科(S61.3)／桜美林大学大学院国際学研究所老年学専攻(H16.3) ②修士(老年学) ③日本老年社会学会、日本社会福祉学会、日本在宅ケア学会、日本応用老年学会、せたがや福祉区民学会(理事) ④陸上競技部の中距離ブロックに所属。4年間の様々な経験が社会人になってから大いに役立ちました。⑤キャンプ・釣り・料理・読書。中でも釣り歴は50年以上にもなり、沖縄に渡って360度見渡す限りの海での釣りは至福の時間です。趣味の延長で釣り雑誌の取材や執筆もしていました。

社会で通用する
総合的な人間力を

体育学部 体育学科 学科長

すぎた まさあき
杉田 正明

◆**就任にあたって**：本学の理念、ミッション、ビジョンに基づく日体大らしさを進化させるべく、アジア最古・世界最大の体育大学である日体大の発展のために使命感と責任感を持って自らが果たすべき役割を一生懸命全うしたいと思います。

◆**抱負**：コロナ禍で不安を抱える学生の気持ちに寄り添った教育や支援の在り方を踏まえた新たな施策を取り入れたいと思います。オンライン・リモートによる学びと対面の学びとを効果的に組み合わせた教育の質向上への取り組みやカリキュラムの改正、より戦略的な広報活動と学生受入(入試)など、学科の先生方とともに諸施策に反映させていきたいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：これまでの当たり前が通用しない社会状況となり、スポーツの在り方やその意義も大きく問われています。今できることを皆で知恵を出し合い、日々、発展的な取り組みが求められています。スポーツの持つ本質的価値は人生に豊かさや成長をもたらすものであると改めて感じています。

◆**日体生に望むこと**：これからは従来の枠組や発想にとらわれない柔軟な姿勢が必要となります。社会で通用する総合的な人間力を養うために、日体大で体育・スポーツを通じて多様な価値観に触れ、しなやかな感性を持ち、深い洞察力と逞しい想像力を身につけ、課題解決力を磨いてほしいことと、社会で活躍できる一流の人材となるために、目先のことにとらわれずに何事にも知的好奇心・探究心、情熱を持って一生懸命粘り強く取り組んで欲しいと思います。

●Profile 杉田 正明(すぎた まさあき)

①三重大学教育学部(H1)／三重大学大学院教育学研究科(H3) ②博士(学術) ③日本体育学会代議員、JOC情報・科学サポート部門長、日本陸連科学委員長、秩父宮スポーツ医・科学賞奨励賞(第1回、第14回) ④陸上部(中長距離)で得た友人、自分の身体で感じたコンディショニングや調整の大切さ、スポーツ科学の重要性への気づきが今の自分の原型となっています。⑤国内外の様々な土地の風土や文化(名所、城、博物館など)に触れる時間。思い出はハワイ島のマウナケア山頂(標高4200m)から見た夕日。

日体魂を発揮し 頑張つてほしい



スポーツ文化学部 武道教育学科 学科長

さいとう かず お 齋藤 一雄

◆**就任にあたって**：武道教育学科は前身の武道学科より歴史と伝統を受け継ぎ、2017年度に設立された学科です。昨年度は初の卒業生を送り出し、この四年間を思い返すと感慨深いものがありました。これからの社会は多種多様な変化に適応できる人材が求められます。本学科を通してその人間力を育成すべく今は使命感に燃えています。

◆**抱負**：昨今、AIやロボット技術が発展しその活躍を見る機会が増えました。その中で求められるのは人と人とのコミュニケーションです。この力を伸ばすための一つに、本学科では伝統文化交流実習があります。海外の人と武道を通じてコミュニケーションを取り、交流を深めます。今後はこのような機会をもっと増やし、様々な価値観に触れることでグローバルな視点を養って頂きたいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：マイナス面だけではなく、ウイルスに対する感染予防意識の向上やオンラインツールの活用など新たに気づいた点が多くあります。これをプラスにとらえることで、今まで以上の力を発揮できるはずです。

◆**日体生に望むこと**：悔いのない学生生活を送って頂きたいです。チャレンジ精神を忘れず、失敗を恐れずどんどん挑戦してください。将来の目標を見据え、最後まであきらめずに一生懸命過ごし、卒業するときに「日体大に来てよかった!」と思って頂くことが、我々にとって何よりも嬉しいことです。学生時代の仲間は一生の財産。人と人との関わりを大切に、目標に向けてとびきりの日体魂で頑張ってください。

●Profile 齋藤 一雄(さいとう かずお)

①日本体育大学体育学部武道学科(H2.3)／弘前大学大学院医学研究科医科学専攻(H14.9) ②博士(医学) ③国際相撲連盟 常務理事、公益財団法人日本相撲連盟 常務理事 ④学生時代は相撲部に所属し、仲間と共に稽古に励んでいました。今でも会えば思い出話に花が咲く大切な存在です。部員全員が一つになってインカレ団体優勝を成し遂げた時の興奮や達成感が今でも忘れられません。⑤大会や遠征で地方に行くことが多いため、その先々で旧跡巡りすることを楽しんでいます。座右の銘は「初心忘れるべからず」

新たな課題に 挑戦する人材に



スポーツ文化学部 学部長

おかで よしのり 岡出 美則

◆**就任にあたって**：スポーツ文化学部は、この3月に初めて卒業生を出しました。スポーツ文化学部に入学したことで自分の可能性が広がった、やりたいことが見つかったと言ってくれる学生が育つように尽力したいと思っています。

◆**抱負**：大学での学びは大学内で閉じるわけではなく、大学外での学びともリンクしながら豊かになります。同じように、日本の良さも外から見ることでよりよく理解できるようになります。異なる人々や環境とのより豊かな出会いが生み出されるように、日本の文化と国際感覚を身につけた学生が育つようにカリキュラムの充実を図りたいと考えています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：今まで当たり前であったことが当たり前ではなくなった点では、スポーツ界や大学に大きな発想の転換を求めたと考えています。それはまた、新たな挑戦課題と既存の良さを確認するいい機会を提供したと考えています。

◆**日体生に望むこと**：2000年を境に、スポーツは国際的な課題や社会的な課題解決に向けた効果的なツールであるとの認識が、国際社会で共有されるようになりました。そのため、ユネスコや国連、日本政府、企業、NPO等が実に多様な活動を展開しています。皆さんには自分の可能性を高く評価し、スポーツを通じた社会的課題の解決に向けて国際社会や日本国内で新たな課題に挑戦する人材に育ってほしいと考えています。

●Profile 岡出 美則(おかで よしのり)

①奈良教育大学教育学部小学校教員養成課程(S55.3)／筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻(S57.3) ②博士(教育学) ③日本体育科教育学会副会長、日本スポーツ教育学会副会長、日本体育学会学会賞 ④大学時代は、大阪から奈良に通っていました。3年生以降、ドイツ語学校にも通い始めました。大学院時代には、資料を確認するために筑波から日本体育大学の図書館にも来ていました。⑤人に会うことが好きです。以前はドイツによく行きましたが、最近、韓国、中国、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、シンガポール、香港、インド、タイとアジアの知合いが増えました。

恵まれた環境を
活用してほしい

スポーツマネジメント学部 学部長

ひびの みきお
日比野 幹生

◆**就任にあたって**：スポーツマネジメント学部長への就任にあたり、重責と大きな期待を感じています。日体大ならではのスポーツマネジメント人材を養成・輩出し、スポーツの発展と社会に貢献していきたいと考えています。

◆**抱負**：スポーツマネジメント教育は、スポーツマネジメントの現場の要請を受けて生まれたものです。スポーツマネジメントの理論と実践を大事にした教育課程を実現したいと考えています。このために、教職員の熟議を通して教育活動の充実をめるとともに、学外資源も活用していきます。そして、スポーツの持つ価値を最大限に活かしてスポーツをマネジメントする知識と技術を修得した人材を養成していきたいと考えています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：新型コロナウイルスは大学生活に大きな影響を及ぼしています。しかし、このような時だからこそ、効果や効率を最大限に追及する、すなわちマネジメントの出番です。今こそ、学生と教職員の工夫が重要な時だと思っています。

◆**日体生に望むこと**：スポーツマネジメントの時代が到来したといわれています。スポーツ界は、スポーツ特有のマネジメントを求めています。しかし、スポーツマネジメント人材として活躍できる者は限定的です。我が国でスポーツマネジメントを修めることができる学部を有する体育大学は日体大だけです。この恵まれた環境を活かすのは日体生である皆さん次第です。自ら学ぶ姿勢を持って積極的になった時に必ず将来は開けるでしょう。皆さんに期待します。

●Profile 日比野 幹生(ひびの みきお)

①日本体育大学体育学部体育学科(S60.3)/早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻(H27.3)②修士(スポーツ科学)③日本体育・スポーツ政策学会(理事)、ヨーロッパスポーツマネジメント学会、日本スポーツマネジメント学会奨励賞受賞(H30)、日本スポーツ産業学会奨励賞受賞(H29)④日体大でスポーツ好きの仲間と一緒にレベルの高い実技の授業や実習を受講できたことは忘れられない思い出です。⑤スタジアムに興味・関心があります。世界各地のスタジアムを訪ね歩くのが大好きです。

日本語の力を高め、
豊かな教養を

スポーツ文化学部 スポーツ国際学科 学科長

やまぐち かずゆき
山口 和之

◆**就任にあたって**：本学の素晴らしい伝統の中で、「スポーツ」と「国際」について学生と共に考え、その意味を見いだすという大きな課題が与えられました。学生と共に悩み、夢を語り、その実現を喜ぶ存在になりたいと願っています。

◆**抱負**：学生各々が「スポーツ」そして「国際」の意味を追求し、それを通して成長できる環境を整えるのが私の役目だと考えております。そのため、国際交流センターと連携し、異文化体験を用意する、英語を含めた外国語に出会う機会を用意する、などを考えています。「スポーツ国際実習」の履修要件としてJICA海外協力隊員派遣基準となるTOEIC330点以上を全ての本学科学生が取得できるようなプログラムも考える必要があります。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：現在新型コロナウイルスにより学生は様々な困難に直面しています。しかし、その制約の中でも多くの工夫により、新たな大学生活が生まれています。こうした問題を乗り越えた先には大きな希望があると信じています。

◆**日体生に望むこと**：日本の大学は国内だけではなく世界に目を向ける必要がこれまで以上にあります。国内基準と共にグローバルスタンダードを視野に入れながら行動する必要があり、その際コミュニケーション手段として必要な外国語、多くの場合は英語を習得することが必要になります。ただし、外国語以上に日本語をしっかり身に付けることを忘れずに生活してください。日本語の力を高め、豊かな教養を身に付けることを常に意識してください。

●Profile 山口 和之(やまぐち かずゆき)

①明治学院大学文学部英文学科(H4.3)/ニューメキシコ大学大学院言語学科博士課程(H17.5)②博士(言語学)③シルフェ会、日本言語学会、日本認知言語学会、日本語学会、JACET、GEN TEFL④洋画好きの父の影響から外国語に興味を抱きました。そのため大学では英語学を、米国の大学院では言語学を研究。言葉の不思議に魅了され、それを深く考え、恩師や学友と大いに語り合った学生生活でした。⑤外国語学習、映画鑑賞、散歩など。座右の銘は「患難が忍耐を、忍耐が練達(練られた品性)を、練達が希望を生み出す」

タフで、思いやりある 日体大生に



スポーツマネジメント学部
スポーツライフマネジメント学科 学科長

よだ みつよ
依田 充代

◆**就任にあたって**：就任にあたって：2021年3月に体育学部社会体育学科がその歴史の幕を閉じました。社会体育学科の精神やカリキュラムを受けついでスポーツライフマネジメント学科は完成年度を迎え、その新たな改革に全力で取り組みます。

◆**抱負**：2021年度には、はじめての卒業生を送り出すことになりますが、その就職・進学先を分析して在学生のキャリアサポートに努めます。また、完成年度を迎えカリキュラムや実習の見直し改革を進めていきます。多くの学生が在学中に地域や社会と関わりを持ち、地域社会に根ざしたスポーツ指導者・体育教師となるための実践力を育てます。さらに、野外実習やレクリエーション活動を通じて人間力の育成に力を入れていきたいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：新型コロナウイルス感染症の影響で、これまでの運動部活動が規制され、多くのスポーツ試合が中止になりました。また、大学の授業が非対面になり不規則な生活や非日常の中で心や身体のマイナス影響が心配されます。

◆**日体生に望むこと**：「強くなければ生きていけない。優しくなければ生きていく資格がない」レイモンド・チャンドラーの名言です。このような社会情勢だからこそ、「タフであり、人を思いやれる日体大生」であって欲しいと思います。苦しいときほど本当の自分がよく見えます。そして人の苦しさを想像することができます。その時に手を差し伸べることができる、強さと優しさは人との関わりの中で育まれます。だからこそ人とのつながりを大切にしましょう。

●**Profile** 依田 充代(よだ みつよ)

①日本体育大学体育学部体育学科(H1.3)／順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科(H29.7) ②博士(スポーツ健康科学) ③日本体育学会、日本スポーツ社会学会、スポーツ産業学会、スポーツマネジメント学会、日本オリンピックアカデミー ④クラブ活動に追われる毎日でしたが、ゼミで学ぶ面白さを知りました。「体育専攻学生の誇りと生きがい」、「共に学ぶ喜び」を実践した学生生活でした。⑤読書とイタリア語。学外研修でイタリア・ローマに1年間滞在し研究したことが今の教育・研究につながっています。

刺激し合い学習を 深めてほしい



スポーツマネジメント学部
スポーツマネジメント学科 学科長

さいとう たかし
齊藤 隆志

◆**就任にあたって**：アフターコロナの社会の在り方を見据え、本学の理念、ミッション、ビジョンに基づき更にスポーツマネジメント学科を発展させること、改革していくべきことを明確にして行動に移していかなければならないと考えます。

◆**抱負**：今後、世界的にニューノーマルな生活様式が定着することで、消費スタイルや生産活動は加速的に変化します。スポーツについても同様であり、スポーツマネジメントやスポーツビジネスは大きな変革期にあると言えます。このような激しい時代の流れの中でも、国際社会や地域社会でしっかりと人生哲学を持ち、自分なりにスポーツや社会の在り方を信念として持ってたくましく生き抜かれる人間になれるよう教育・指導に努めます。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：見るスポーツの影響が大きいでしょう。遠隔的に観戦可能な映像コンテンツへの期待が高まり、より面白く、リアル体験できる映像や仮想空間のニーズが高まります。またそのための技術革新が加速すると考えられます。

◆**日体生に望むこと**：講義・実技・実習、サークル活動やボランティア活動などにおける学生たちのフットワークの軽さと旺盛な行動力を感じています。そして授業課題をよく調べ、明るく元気に発表できるプレゼン能力の高さです。この長所を生かしつつ、授業を批判的に聴き、よく考え抜き、他者と議論するなど意欲的に授業に参画することで、創発的な価値創造する場を体験することを通して学習を深めていってほしいと思います。

●**Profile** 齊藤 隆志(さいとう たかし)

①筑波大学大学体育専門学群／筑波大学大学院体育研究科 ②体育学修士 ③日本体育・スポーツ経営学会、日本体育・スポーツ政策学会、スポーツ産業学会、日本体育学会 ④陸上競技部に所属。一方で陸上競技以外の分野を勉強したいと考えスポーツマネジメントを学ぶ体育経営管理研究室に所属しました。⑤コロナ禍でもできるウォーキングをしています。健志台キャンパスの近くの「寺家ふるさと村」を歩いています。広大な水田と森が広がる田園風景を眺めながら歩く、トトロの世界を体験できます。

自分を信じて チャレンジを



児童スポーツ教育学部 児童スポーツ教育学科 学科長

す な が み か こ
須永 美歌子

◆**就任にあたって**：児童スポーツ教育学科の役割のひとつに、次代を担う子どもたちの「健康で豊かな社会」を創造するために貢献できる学生の育成が挙げられます。その責務を果たすためにも学生の教育に全力を尽くす所存です。

◆**抱負**：児童スポーツ教育学科は教育の中でも特に乳幼児期・児童期の発達段階にフォーカスしていることが特徴です。子どもたちの心身の発達に応じた運動遊び、体づくり、スポーツ・健康分野で実践的指導力を発揮できる人材の育成を目指しています。専門的な知識を基盤とし、教育現場の様々なケースに対応できる能力を身に付けるためにも、教育および指導現場との交流を深める機会の充実を図れるよう取り組んでまいります。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：コロナ禍においてスポーツ界や大学教育におけるICT化が一気に加速しました。今後は、デジタル技術と実際の学びを上手に組み合わせた教育を具体化し、より効率的に学習効果を高める手法が展開されることを期待しています。

◆**日体生に望むこと**：日体大生は、真面目で純粋、そしてひたむきに努力する才能に優れています。それはスポーツはもちろんのこと、学問にも活かすことができるでしょう。大学生時代の過ごし方は、その後の社会人生活にも影響を与えます。多様な人と交流し、積極的に学び、考え、視野を広げていただきたいと思います。自分の可能性を信じ、高い志をもって、色々なことにチャレンジしてほしいです。

●Profile 須永 美歌子(すなが みかこ)

①日本体育大学体育学部体育学科／日本体育大学大学院体育科学研究科②博士(医学)③日本体力医学会(理事)、日本トレーニング科学会(理事)、日本オリンピック委員会強化スタッフ④陸上競技部に所属し、合宿所生活を送っていました。一方で、大学院生の実験を手伝うなど、研究活動にも取り組んでいました。楽しく充実した毎日でした。⑤学生と話をすることが大好きです。授業の内容だけでなく、様々な事柄に対する考えを聞くと、多くの気づきを得ます。気軽に話しかけてください。

最も自由な時間を 充実したものに



児童スポーツ教育学部 学部長

こ ん ど う と も や す
近藤 智靖

◆**就任にあたって**：学部長に就任して3年目になります。コロナをはじめ変化の激しい社会の中で、様々な課題が山積していますが、社会状況の変化を見極め、臨機応変に対応し、学生や教職員のために力を尽くしたいと思っています。

◆**抱負**：力を入れたい取組は3つあります。1つ目は、宣伝活動です。多くの高校生に本学部の良さを知ってもらい、入学につなげたいと思っています。2つ目は、学生の就職についてさらに手厚いサポート体制を作りたいと思います。3つ目は、学部の教育と研究の充実です。教員の授業力向上のために教員同士が授業を見合う研修をするなど、学生だけが学ぶのではなく、教える側の力を付けるための仕組みづくりを進めたいと思っています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：感染の拡大によって授業、クラブ活動等、様々な影響がありました。学生と教職員の健康と安全を守り、一人一人の生活を充実させていくためには、リーダーが先を見通し、臨機応変に対応する力が重要だと感じました。

◆**日体生に望むこと**：学生時代は人生の中でも最も自由な時間であると思います。学内外で自分の居場所を見つけ、様々な経験や学びをして欲しいと思っています。授業や実習だけではなく、クラブ活動、アルバイト、ボランティア活動に取り組み、様々な世代の人と関わって欲しいです。楽しいことばかりではなく、ひどく悩むことも多いと思いますが、何事に対しても試行錯誤を繰り返しながら、人としての成長を遂げてもらえればと思っています。

●Profile 近藤 智靖(こんどう ともやす)

①宮城教育大学教育学部(H6.3)／筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻(H18.3)②博士(体育科学)③日本スポーツ教育学会(理事長)、日本体育科教育学会(常任理事)、日本学校体育研究連合会(理事)④日体大卒ではありませんが、学生時代は日体大生と同じような経験をしてきました。男子寮、硬式野球部、体育コースに所属し、海浜・スキー・キャンプ実習にも参加し、仲間と大騒ぎしていました。⑤家庭では「仕事が趣味の人」「2階の住人(仕事場が自宅2階にあるため)」と呼ばれます。

時代の要請に応えた 柔道整復師に



保健医療学部 整復医療学科 学科長

くぼやま かずひこ
久保山 和彦

◆**就任にあたって**：日体大創成期の明治33年、本学で生理衛生学の教鞭をとった医師・川瀬元久郎は、日本の「体育」の位置付けを変えました。川瀬は「健康のための体操法」を考案して「体育と保健医療」の接続を達成しました。この歴史を原点に、本学科では現代医学に向けて「最善の医療」とは何かを問い続けていきます。

◆**抱負**：現代の柔道整復は「創造的な再活性化」とも言える現象が起き、その活動の枠組みが日々拡大しております。柔道整復師の活躍場面は、健康増進、運動・スポーツ或いは健康寿命延伸、介護・福祉など資格活用分野の広がっているのです。こうした場面において、適応可能な知識と技術を持った学生を育てたいと考えています。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：2021年度は、昨年度の授業実践の知見をよく検証し、また、専門的医療の担い手を養成する学科として、感染拡大予防に関する情報や具体的方法を実践することで、社会の手本となるような行動を試みます。

◆**日体生に望むこと**：「柔道」は、日本の身体技法(武道)として全世界に展開しています。柔道が広がる要因には学校体育で「安全に行える教材」という要素がありました。また、その安全性は柔道家が用いる怪我の治療術である柔道整復術が付加されることにより、さらに担保されたのです。令和の時代を走る皆さんは、身体活動や競技を通じて得た「身体の実践的知識」を基にして、それを医療的知識と重ね合わせることで、日体大生として健康・医療・福祉の知見を、国内外の人々に発信出来るよう挑戦してください。

●**Profile** 久保山 和彦(くぼやま かずひこ)

①日本体育大学 体育学部 武道学科(S61.3)／放送大学大学院 文化科学研究科 (H16.12)②修士(学術)、博士(体育科学)③日本体育学会、日本武道学会、日本柔道整復接骨医学会、日本医学教育学会、日本体力医学会、日本登山医学会④柔道部に所属し日体柔整専門学校夜間部では柔道整復学を学びました。「柔道(殺法・活法)」に没頭しました。⑤古今東西の「人の活動」に関わる文化情報を把握することで「日本人とは…」を日々問うています。そのために何事にも体験を先行させることで「実践知」を集積しています。

良き伝統を誇りに 立派な医療人に



保健医療学部 学部長

ひらぬま けんじ
平沼 憲治

◆**就任にあたって**：保健医療学部では、人の痛みがわかる思いやりと優しさを持った医療人を育成していきたいと思っています。社会に貢献できる人材を輩出し、地域の皆様からも信頼され、愛され、活気に満ちた学部を築いていきたいと願っております。

◆**抱負**：今までも日体大は体育学部において怪我(スポーツ損傷)に関する研究・教育を行ってきましたが、そのテーマは、怪我の予防が主でした。今後は怪我の予防のみならず、診断・治療が研究・教育の対象となり、新しい展開が期待できます。学生教育では、知識や技術を習得するための教育のみならず、医療現場実習等を通じて豊かな人間性を形成するための教育を行いたいと思います。そのためにも実習等の更なる内容(設備等)を充実させる必要があります。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：令和2年度は大学においても実習・実技を遠隔で行わなければならない、医療人を育成するのに十分な授業を行えませんでした。医療人にとって患者さんを5感(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)を使い直接診ることは、技術を習得するには不可欠です。今年度は、実習・実技に関しては3密を避け徹底した感染予防をして対面で行っていききたいと思います。

◆**日体生に望むこと**：本学は良き伝統を受け継いだ素晴らしい大学です。学生は礼儀正しく、規律ある活動をしています。日本の良い伝統・美德が本学には残っています。この伝統・校風を大切にし、毎日を精一杯生き、誇りと自信を持って卒業し、立派な社会人になってください。

●**Profile** 平沼 憲治(ひらぬま けんじ)

①産業医科大学医学部医学科(S60.3)②博士(医学)③日本整形外科学会、日本体力医学会、日本臨床スポーツ医学会評議員、日本整形外科スポーツ医学評議員、「第9回秩父宮記念スポーツ医科学賞—奨励賞—」受賞④北九州の産業医科大学で、スポーツドクターを目指し6年間過ごしました。入学早々、肺炎に。環境が変わり、自分では気づかないストレスがあり、抵抗力が低下していたのだと思います。新入生、特に地方出身者は体調管理に気を付けてください。⑤サッカー、アメフト観戦。ゴルフ、海外旅行。



「どうなっているか」
「なぜそうなるか」
「どうすればよくなるか」

大学院研究科長代表

あ え み ち よ し
阿江 通良

◆**就任にあたって**：我が国の体育スポーツ分野における智、その基礎となる研究の重要性が認識されつつあり、また学部生の進学希望者も増加していることから考えて、日本体育大学における大学院の認知度が上がってきています。そこで、実践的研究の日体大大学院を目指したいと考えています。

◆**抱負**：1) 基礎的研究はもとより、日体大の強みを活かした実践的研究を推進するために、実践系の分野（指導方法論、コーチング学など）との密な連携を推進します。2) 実践系教員の大学院担当者を増します。3) 院生はもちろん、教員も学会、特に国際学会における研究発表を増すことにより、国内外の体育スポーツ系学術団体における日体大大学院の存在感を増します。4) 競技力向上や指導方法開発のための研究に貢献します。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：大学院では、授業等は多少の制約があったが深刻な状況にはなく、何とか実施できました。しかし、実験・計測・測定・調査の計画が大幅に変更（縮小）され、研究や論文執筆に大きな影響がありました。

◆**日体生に望むこと**：自分で工夫して考え、何らかの適切な解決法を試行錯誤して見出すようになってほしい。「どうなっているか」「なぜそうなるか」「どうすればよくなるか」をつねに考えてほしい。そのためには、大学や大学院で基礎的な勉強をしっかりとやってほしい。基礎的な勉強は、一見すると、つまらない側面があるが、心や頭のトレーニングには最適です（過負荷の原則）。

●Profile 阿江 通良（あえ みちよし）

①東京教育大学体育学部体育学科（S48）／筑波大学大学院体育科学研究科博士課程（S57）②教育学博士（筑波大学）③日本体育学会、日本コーチング学会、日本バイオメカニクス学会、International Society of Biomechanics in Sports、日本体育協会公認スポーツ指導者等表彰、日本陸上競技連盟 秩父宮賞、International Society of Biomechanics in Sports, Dyson Award、日本スポーツ協会第22回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 功労賞④陸上競技部に所属（走高跳）。4年生の関東インカレで2m00を跳び3位に入賞。⑤自宅の庭いじり、スポーツ観戦、読書。もう少し極めると、身体運動の研究が趣味となると予想している。



病院前医療を担う
救急救命士のための
真の教育を追求

保健医療学部 救急医療学科 学科長

お が わ さ と お
小川 理郎

◆**就任にあたって**：就任にあたって：世界を相手に闘っている日体大の数多くの素晴らしいアスリートに負けずに救急医療学科を、Prehospital Care で日本一、世界一へ導くために新たな挑戦を続けます。

◆**抱負**：救急救命士が現場で施行する医療行為は今後さらに増えて行くでしょう。病院前の救急システムと治療の充実が救命率を上昇させることが様々なデータで明らかにされています。このような社会の期待に応えるためにも、「医師でなく、救急救命士が救急救命士を教育する大学」に、「救急救命士自ら考えて真に学術研究ができる大学」になることを目指します。救急救命士の再教育システムの制度も構築していきたいです。これらのことは今日体大でしかできません。

◆**新型コロナウイルス感染症の影響**：スポーツ界、大学教育は多大な影響を受けました。今こそ大学の真価が、教育者・指導者の人間力が問われるときだと思っています。

◆**日体生に望むこと**：利他の精神と社会的礼儀と感謝の気持ちを忘れず、スポーツと勉強の両立を望みます。私の座右の銘です。「諦めるのはまだまだ早い。最後の最後まで。危急の人とその家族を救えば永遠の誇らしい満足感がやってくる」。救急医療学科で学ぶことに誇りを持って学業・実習・諸活動に取り組んでほしいと思います。

●Profile 小川 理郎（おがわ さと）

①日本医科大学大学院医学研究科②医学博士③日本医科大学関連施設で救急医療災害医療などに従事、専門・研究分野は重症多臓器障害患者の診療と救急医学教育。日本外科学会 日本救急医学会 指導医・専門医 評議員 など④大学入学直前に父が突然死して家庭崩壊を招きました。苦学生となり先がみえない毎日で必死でした。逆境の中で良き思い出は母の愛情と多くの人に恵まれたこと。人に真に優しくなれました。⑤動物と魚の餌やり。嬉しそうに食べてくれる姿に癒やされます。天体観測、宇宙好き、海好きscuba diving、ピアノ演奏と音楽・スポーツ鑑賞。熱烈巨人ファン。医師になって以来完全に医学の研究と勉強、人の命を預かる仕事が趣味となりました。

日体大を 極める

日体大の新体制がスタートした。
風の時代と言われる中で、
日体大に新風を吹き込むことだろう。
いま、近代日本を築いた
一人の人物が注目を集めている。
その日体大との縁を紹介しよう。

日体大と渋沢栄一

優れた業績を残した人々は、通底する哲学を持っている。今年、とりわけ注目を集めているのは「近代日本資本主義の父」渋沢栄一（1840～1931）だ。渋沢の中心的な考えは「道德経済合一」である。その意味は、企業の目的が利潤の追求にあるとしても、その根底には道德が必要であり、国ないしは人類全体の繁栄に対して責任を持たなければならぬとされる。この信念のもと、生涯に約500の企業の育成に係わり、約600の社会公共事業や民間外交にも尽力した。

「道德経済合一」はスポーツにも共通する。経済を競技力に例えるなら、道德はスポーツマンシップ、国際平和、あるいは日本の武道における道の精神などであろう。

さて、渋沢栄一は日体大の前身である日本体育会の臨時拡張委員（1892～1901）、社団法人日本体育会の名誉会員（1901～1940）を務めている。臨時拡張委員とは、日本体育会に対して国庫の補助が交付されることになり、国の機能を担うに相応しい事業を遂行するために組織された委員会です事業に対する諮問や監督にあたる職である。当時、国庫補助を受けることは日本体育会が特別な存在であったことを意味し、委員会もそうそうたる人物によって構成された。

没後90年になろうとする今、渋沢は世界とスポーツ界をどのように見ているだろうか。

参考：公益財団法人 渋沢栄一記念財団ホームページ

令和3年度 日本体育大学 役職者一覧

【学長・副学長】	
学長	石井 隆憲
(企画・管理・運営担当)	
副学長	水野 増彦
(教学・学生生活担当)	
副学長	八木沢 誠

【IRE 室＝内部質保証機関】	
室長	近藤 智靖 (兼)
室長補佐	鈴川 一宏

【教学組織】	
研究科長代表	阿江 通良 (兼)
体育科学研究科長	阿江 通良
教育学研究科長	角屋 重樹
保健医療学研究科長	横田 裕行
体育学部長	水野 増彦 (兼)
体育学科長	杉田 正明
健康学科長	横山 順一
スポーツ文化学部長	岡出 美則
武道教育学科長	齋藤 一雄
スポーツ国際学科長	山口 和之
スポーツマネジメント学部長	日比野 幹生
スポーツマネジメント学科長	齊藤 隆志
スポーツライフマネジメント学科長	依田 充代
児童スポーツ教育学部長	近藤 智靖
児童スポーツ教育学科長	須永 美歌子
児童スポーツ教育コース主任	関 芽
幼児教育保育コース主任	中島 龍一
保健医療学部長	平沼 憲治
整復医療学科長	久保山 和彦
救急医療学科長	小川 理郎

【附置機関等】	
図書館長	木村 直人
学生支援センター長	津田 博子
副センター長	藤田 将弘
学修・キャリア支援部門長	藤田 将弘 (兼)
副センター長	松浪 登久馬
生活支援部門長	松浪 登久馬 (兼)
教職センター長	半田 勝久
アドミッションセンター長	三宅 良輔
大学院教学センター長	阿江 通良 (兼)
教育企画センター長	小林 正利
副センター長	大石 健二
総合スポーツ科学研究センター長	野井 真吾
体育研究所長	中里 浩一
オリンピックスポーツ文化研究所	関根 正美
スポーツ危機管理研究所	野井 真吾 (兼)
アスレティックデパートメント長	水野 増彦 (兼)
アスレティックデパートメント長補佐	西山 哲成
ハイパフォーマンスセンター長	杉田 正明 (兼)
コーチングエクセレンスセンター長	伊藤 雅充
スポーツ・トレーニングセンター長	黄 仁官
国際交流センター長	金田 英子
健康管理センター長	平沼 憲治 (兼)
日本体育大学クリニック院長	平沼 憲治 (兼)
寮監長	根本 研
(保健医療学部)	
スポーツキュアセンター長	伊藤 譲

応援団部 監督

鈴木 憲一

伝統を受け継ぐとは踏襲することではなく

新たな歴史を積み重ねていくこと

自ら考え工夫することが大切

経験してきた失敗談は惜しまず教える
それを教訓として今を学びなさい

社会で役立つ人材に育ててほしいからだ

——応援団の創立

昭和34年としていますが、実際の活動はその翌年、正式には昭和34年度です。元副学長の笹淵五夫先生や前駅伝総監督の渡辺公二先生らと同期の苅米俊先輩によって創団され、初代団長に就任したのが始まりです。箱根駅伝の応援に駆け付けた時、日体大にも応援団を、と思われたことがきっかけと伺っています。以降毎年、ご逝去された年の箱根駅伝応援まで同行

されてきました。箱根駅伝は4年生最後の応援で、数日後には幹部交代（代替り）となりますが、一時期は往路終了後の宿泊地で行っていたこともあったそうです。現在もその伝統は受け継いでいます。

創団以来、昭和50年代くらいまでは「兼部」していた先輩方が大半でした。ですので昼休みに練習していたんです。放課

——応援団の歴史

後にはそれぞれの部活動に参加するための時間設定なんですね。私が入学した昭和59年は大半の団員が兼部していなかったのですが、その名残だったのでしょうか、昼休みは恐怖の時間でした（笑）。私もそうでしたが、応援団に入団したくて日体大に入学して来る学生など当時は皆無です。ところが、ほとんどが運動部に入部する訳ですから、ほとんどの運動部でも並みの選手では通用しないので、応援団と兼部

して活動する。応援団の活動が主になっていった先輩も数多くいたようです。平成になってから兼部する団員はほとんどいませ

んが、平成9年度に団員不足から存続の危機がありました。当時の学生寮にいた空手道部や柔道部の部員らが名乗りを挙



Next is you 日体魂の聖火リレー

鈴木憲一監督からエールをいただきました。

日体大へ入学したことを先ず誇りに思ってください。高校時代に培ってきた競技力を更に向上させる、突き詰めて学問を研究する、新しいことにチャレンジするなど、次のステップに進んで頑張ることを大事にして下さい。困難に陥った時に役立つのは、さまざま学習してきた経験を活かし、常に工夫していくことです。一人の力では乗り越えられなくても、師や仲間と共にであれば打破できることもあるでしょう。それを大切にしていれば、必ず道は開けるものです。



運動部の監督は当り前の存在ですが、応援団の監督って何するのかと今でも聞かれます。選手を揃え鍛えて、戦術を考え戦略を練る。環境を整え、選手の意見を聞き、全体を総括するのが監督なのでしょうが、応援団の場合は「もの言う雑用係」ですね。喝を入れるご意見番的な側面と、遠目から常に見守る側面と。当然、直接指導する時はありますが、その時は学生目線での指導はしません。社会一般的にそれは通用することなのか、その言動は役に立つことなのかなど、団員だけでは判断できないようなことを社会目線で指摘する役もあります。

—— 応援団の監督とは

彼らは大半が高校までは県内でも有数の選手だったのですが、気持ち切り替えて応援団の活動に専念してくれたお陰で、新しい血が入ったと言いますか、良い意味で化学反応したと言っ



のか、悪しき伝統的なものではなくりましたね。今年も存続の危機を迎えていましたが、応援団で活動したいと受験した4名が無事合格し、また新しい応援団がスタートとなります。嬉しい限りですね。

—— 指導者として

日体大で指導されている先生方は、地位も名声も実績もある方ばかりですが、私くらいです



よ、地位も名声も実績もない、それに金もないのは。成功を語るな

なんて滅相ありません。社会人となつてからも失敗はよくしてきたものです。そこだけは誇れますよ(笑)。だからこそその失敗談は恥も外聞もなく、惜しみなく教えます。反面教師としては日体一ですよ、確実に。「やってみなければわからない」が私の信条ですが、これをやったら失敗するぞってことを教えてやらせる時もあります。結果、だから言っただろと身をもって体験させることで学んでもらえればよいと思っています。工夫せずに踏襲している時は、結構厳しく指摘しますね。なぜそうするのかと聞いて答えられない時や、安易に伝統ですと答えてきた場合は特に工夫することの大事さは口酸っぱく言います。応援の技術を極めたとしても、それが直接社会で役立つものではありません。プロがある訳ではないですから、精神面や生活面の指導が大半です。人生で失敗をしなかつた方なんていないでしょうが、失敗をよく知っている者として、俺みたいな

反面教師にはなるな、が指導の根底にあります。だから団員はしっかりしなければと感じるのでしょうね。監督として27年目を迎えました、指導者なんて言われるのはおこがましい。未だ先輩の延長線です。



—— 「応援団らしさ」とは

一口に「応援団らしさ」と言っても、昭和の時代と現在では「らしさ」は違うでしょう。昔は強面で近寄りた

い存在であつたかもしれませんが、今は爽やかさも必要ですね。しっかり話ができる、立ち振る舞いを常に意識している、臨機応変に動けるなどは昔と変わりませんが、時には笑顔で、時にはビシッとした姿勢の両側面を持つていなければなりません。応援団には補充選手はいません。全員がレギュラーだから厳しいんですよ。幹部(最上級生)になれば必ず役が与えられますから、その自覚をもっていれば、黙つていても身に付いていくもので、私はその意識付けをするだけです。学内外で常時見られているのだから、と言動を意識している者が「らしい応援団員」です。

—— これからの応援団

一言でいえば大学のために尽くすのが応援団の使命ですから、学内行事や各部の応援は勿論、祝勝会や祝賀会、地域の祭りやイベント、小中



高の応援指導など、今後も与えられた機会は全力を尽くすのはあたり前。ますます日体大に貢献する応援団を目指しています。そのためには



応援技法の研究も大切になりますね。日本の応援団って世界的にも固有の文化的側面があります。同じ応援でもアメリカのチアリーダーやヨーロッパなどのサポーターとは一線を画しています。日本人だけです、学ラン着て大声出して、硬派で厳しいってイメージされるのは。応援の評価って私は統制美で決まってると思っています。一言でいえばひとつになっていること。そのためには、チアリーダーやサポーターから学ぶことはあります。他大のピタリと揃った拍手や有名な踊りを初めて観たときは感動しましたが、テレビ越しに観た北朝鮮美女軍団の応援風景は、応援団に関わつてから30数年になりますが、一番の衝撃でした。あの艶やかさが迫力に変わるんですから。凝り固まっていた考えがすつ飛びましたね。文化的側面も残しつつ、新たな技法を取り入れて、応援に來てもらいたい応援団でありたいですね。大会等はない、結果を残すことのない応援団にとっては「信頼」が全て。今後もそうである団員を育成し、研究しなければなりません。まだまだ勉強中です。

◆プロフィール

鈴木 憲一(すずき けんいち)
昭和40年、東久留米市生まれ、中学卒業まで過ごす。埼玉県立和光高等学校出身。中学・高校時代はバレーボール部に所属。昭和59年、体育学部社会体育学科入学。応援団に入団し幹部時は統制長を務める。平成7年1月に監督就任、今年度で27年目を迎える。全日本学生応援団連盟評議員事務局長、常任参与を歴任。妻と一男一女の4人家族。オレ、仮入団のままなんだよなあ、は鉄板ネタ(笑)。

Next is you

日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

16

応援団部 団長

花島 優太

応援団を続けてきたからこそ

築くことができた自信

応援団の誇りを団長が語る



るに連れて座学の授業が多くなりましたが、興味深い講義を多く受講できたので満足しています。



——日体大に入学した理由

高校では保健体育科に在籍していましたが、体を動かすことが好きだったので、進路については早くから日体大への進学を志望しておりました。実際に入学して1、2年生の頃は実技科目が多く、非常に充実していました。学年が上が

——応援団に入団して

自分は高校まで大学応援団の存在を知りませんでした。しかし、先輩方の温かいご指導のおかげで応援団員として成長できたと感じております。日々の練習を終えた後の達成感は自信へと繋がり、多くの人々の前で堂々と全力で応援が出来るようになります。最後の学生生活において、全力で取り組めることに巡り合うことができ、心から良かったと感じています。

——コロナ禍の影響

試合が行われていても応援に駆け付けることが出来ない状況がこの1年続きました。その様な状況下で応援団として何が出来るかを考え、動画を用いての応援を試みました。入団当初は4年次に東京五輪の代表選手を応援できると考えておりました。残念ながら延期となり、在学中に応援する事は叶いませんでした。しかし、最も辛い思いをしているのは選手の皆さんです。試合会場で応援できる状況になった際には、今まで以上の応援が出来るよう、努めていきます。

——嬉しかった思い出

1年生の秋、硬式野球部が日本一に輝いた瞬間です。自分はスタンドにいる観客の皆さんに、共に日体大を応援してもらった様、全身全霊で盛り上げました。リ



Next is you 日体魂の聖火リレー

花島優太団長からエールをいただきました。

この一年、新型コロナウイルスの影響により、我々も思うような活動ができない環境に追い込まれました。そこで下を向くのではなく、今自分ができる事を考え、行動をしていけば必ず自身の成長に繋がります。それは決して無駄にはならないと確信しています。まだまだ大変な状況が続きますが共に頑張りましょう。

この4年間で身に付けたのは、
どんな緊張にも負けない精神力、
そして応援団「らしく」生き抜く姿勢

◆プロフィール

花島 優太 (はなしま ゆうた)

2021年3月卒業。6歳からサッカーを始め、高校時代までサッカーに打ち込む。東京都立駒場高等学校から日体大に進学。新入生のオリエンテーションにて応援団の演舞を目にし、そこで大きな感銘を受けた。自身の成長に繋がることを確信して入団を決意。今年度は団長として応援団の活動を牽引してきた。趣味はバイクでのツーリングと筋力トレーニング。

グ戦から応援してきた日体大の仲間が、日本一に輝いた時の興奮と喜びは今でも昨日のこのように思い出されます。

—— 応援で大事にしていること ——

前提としてどんなに劣勢であっても勝利を信じ、最後まで全力で応援をします。その上でいかに周りを巻き込むかを考えております。我々を知らない方に厳しい表情で接しても簡単には受け入れてもらえません。楽しく応援してもらうために、時には笑顔で駆け寄り、声を掛ける事もあります。自分の声を選手に届ける時と、観客の方と接する時とで表情を変える工夫をしています。一人ひとりのコミュニケーションを大事に活動しております。

—— 応援団に入団してからの変化 ——

自分が常に周りから見られているという意識を持つようになりました。学ラン姿でいるため学内では先生方や職員の方、学生からもよく目につきます。応援団員として恥ずかしい言動、応援団員らしさを心掛けるようになりました。学外においてもそれらを忘れることはありません。また、先輩方と話す機会も多くある為、自信をもって社会人の方と接することが出来るようになりました。この事は就職活動の面接でも活きました。応援や演舞は多くの人の前でやることなので、緊張に負けない精神力も身に付きました。これらは応援団で培える将来必ず活きる力です。

—— 後輩への期待 ——

応援団で活動する意義は正直、経験しないと分からないと思います。最初はがむしゃらに先輩に食いつき、次第に自身の成長に気が付きます。人のために全力になれる人間は、非常に魅力があると自分は思います。選手が辛い時、逆境に立たされている時に、我々の声が力になればこんなに嬉しいことはありません。社会に出た際、どんな理不尽にも負けない精神力、常に堂々と突き進む力を身につけると同時に、日体大応援団の良き伝統を守り、大学の力として、自身の成長に向けて頑張つて欲しいです。



日本体育会

Next is you

日体魂を受け継ぐ者

前向きに、たくましく、
スポーツの力、平和と命の尊さを
世界の未来に向けて発信していく